

## 島んちゆへの思い

龍郷町立大勝小学校 五年 石原 知佳

その始まりは、「ネリヤ」という男の神様と「カナヤ」という女の神様が起こした出来事だった。

天界では、男の神様と女の神様は別々の場所に住んでおり、親交を結ぶことを禁じられていた。ある日のこと、かりに来ていたネリヤと、水をくみにきていたカナヤは、たまたま湖で出会った。一目見ただけで、お互い好きになっちゃった。その日から二人は毎日、密かに湖で会っていた。そのことはすぐに、神々の王である「カミコウ」の耳に入ってしまった。二人は裁きにかけられた。規則を破った二人に、神々は怒り、天界から追い出そうとした。ところが、かばうものもいて大きな問題となった。そこで悩んだ末、カミコウは二人の神の力を奪い、人間界に下ろすことにした。

「人間界でくらすせば、力を失ったことを後悔するであろう。」

と二人に言い放った。

人間界に下ろされて、しばらく二人がさまよっている

と、  
「うがみんしよら。うら、たるよ。」

と声をかけられた。とまどいながらも  
「異国から来たネリヤとカナヤです。」

と伝えると、

「あげえ。イコクから来た人ち。じゃあ、なまからドウカ。困ったことちばあれば、気軽に声かけてくんしよれ。」

下ろされたのは、「じいま」という小さな島らしい。その人々は、見ず知らずの二人に寢床を与え、ヤギ汁をふるまってくれた。二人は一気にこの「じいま」を好きになった。

住み始めて数か月後、二人は結婚して夫婦となった。人々と昼間は一緒に汗を流し働き、夜は酒をくみかわして多くのことを語り合った。きれいな声で鳴く鳥や鮮やかな色をした魚たち。ガジュマルに住むケムンという妖怪や海の幸、山の幸をたくさん使ったおいしい料理。この島のことを知れば知るほど好きになった。

二年ほど月日が経ったある日のこと、カナヤは突然腹痛におそわれた。それから三日三晩もがき苦しんだ。ネリヤは島の人々に助けを求めた。人々は何もできず、ただひたすらカナヤの無事を神様に祈るだけだった。四日目の朝、突然

「おぎやあおぎやあ。」

と泣き声がかきこえた。赤ちゃんが生まれたのだ。人々は

喜んだが、と同時に不思議に思ったことがあった。それは、カナヤのお腹が全くふくらんでいないのに赤ちゃんが生まれたことだ。その様子を見ていたカミコウは急いで二人を天界にあげた。

「なぜ、もどしたのですか。」

「お前たちを人間界におろすときに、力を全てうばったつもりだったが、残っていたとは。もうあの島にもどることはできない。」

「もどしてください。私たちは人間として生きる中で、多くのことに気付いた。汗を流して働くことの大切さ。助け合い、自然と共に生きていく強さ。新たな命が生まれる瞬間の素晴らしさ。人間は、私たちが思っているよりとても美しい生き物だった。だから、人間界で人間として生きたいのです。」

と深く深く頭を下げた。カミコウは言った。

「もどることは許されない。だが、力をもどし、お前たちに島を与えよう。そこで、家族三人でくらすがい。」

「……分かりました。しかし、心残りが一つあります。あの島の人々へ世話になったお礼として何かしてあげたいのですが、どうすればいいでしょうか。」

「力を使い、人々に自然の恵みをもたらすがよい。天空ウサギに手紙をもたせよ。金色の天空ウサギを人間界

の生き物に似せるために、墨をかぶせて黒くして、そなたらに一匹さげよう。」

二人は、黒くなった天空ウサギに手紙を持たせ島に送った。

「突然いなくなってしまうって不思議に思ったことでしょう。私たちは人間とは異なる存在です。『じいま』からはるか遠い島にいます。しかし、私たちが近くに感じるはずです。島に向かって祈ってください。そうすれば、災いのない年になり、自然は豊かな実りをもたらすでしょう。」

手紙を読んだ人々は、こつ然と姿を消したネリヤとカナヤのことを思いうかべた。そして手紙に書かれているとおりに、島へ祈りをささげた。人々は二人への思いをこめて、その島を「ネリヤカナヤ」と呼ぶようになった。手紙をとどけた黒くなった天空ウサギは、「クロウサギ」として、島に住みついた。

「ネリヤカナヤ」には、今でも神様が住んでいる。いつかネリヤカナヤを見つけてくれるかもしれない「じいま」の人々のことを思いながら。